

山中優著「ハイエクの政治思想 - 市場秩序にひそむ人間の苦境 - 」^{けいそう}勁草書房 2007年3月15日刊を読む

「社会主義」と「自由主義」を考える

1. はじめに

- (1) 社会主義と自由主義は、自由と繁栄という目的を互いに共有している。
- (2) ゆえに、目的それ自体の倫理的妥当性についての議論を必要とせず。
- (3) その目的を達成するにあたって両者がそれぞれ採用する手段の有効性のみを問題とすれば、それで足りる。
- (4) 自由主義の採用する手段とは自由市場経済である。
- (5) 社会主義のそれは中央計画経済である。

2. 「社会主義」とは

- (1) 社会主義的中央計画経済は、私的所有権を廃止し、一国の経済活動をあたかも単一の工場を経営するかのように、中央集権的に運営しようとした。というのも、私的所有権に基づく市場競争の「盲目性」こそが、諸悪の根源だったからである。
- (2) 資本主義の下では、個々の生産者たちは自らの不完全で断片的な個別の知識に基づいて行動せざるをえない。そこには生産活動を導く全体的な展望は何もなく、生産はある時点では不足し、ある時点では過剰になる。それは数多くの手探りと実験、そして数多くの痛ましい経験を経なければならぬ。それでいて、そこで得られる結果は常に不完全であり、常に一時的なのである。
- (3) 理想として提示する新しい社会にあっては、このような不完全で痛ましい市場競争の盲目性は姿を消す。というのも、私的所有権が廃止された後、ある一つの中央統制機関がすべての生産活動の受託者となり、あらゆる物質的資源の開発を司るからである。その機関は、その優越的地位によって全体についての包括的展望を持ち、産業の仕事場のあらゆる部分を一度で同時に看取することによって、生産を指揮し、それを消費と調和させ、生産諸手段を最もふさわしい人材に委託する。この機関は、たえず人々の能力を知ろうと努め、その能力を発展させるのに最もふさわしい地位にあるから、各自の能力や仕事とその実際の報酬との間でのアンバランスは消滅せられ

れる。社会全体において適材適所に人材が組織的に配置され、各自が間違いなく「その能力に応じて類別され、その仕事に応じて報酬を受け取る」という状態が、中央計画主体による組織的な産業指揮によって実現されるだろう。それまで「持てる者」から「持たざる者」に対して敵対的に注がれてきた力が、ここでは組織的に相互に結合されることになる。それまで敵対的な階級同士の間での「搾取」に力が注がれてきたのに対して、今度は人間が互いに協力して、自然に対してその力を効率的に注ぐことになるのである。

(4) ここにおいて人々は、搾取的な「支配」のくびきから解放され、中央統制機関の「管理」の下に、自然への共同的働きかけに参画する共同組織の一員となるだろう。この「管理」は決して「支配」ではない。というのも、それは生産力増大のための実証的な法則に則ったものであるがゆえに、恣意的なものとはならないはずだからである。そのような共同組織の一員として、人々は自然に及ぼす組織的な力を増大させ、自由と繁栄を実現する。他人の恣意的な干渉を受けないという意味での消極的な自由ではなく、物事を実際に達成できる有効な力を集団的に獲得するという意味での積極的な自由を実現すると同時に、市場競争の盲目性の解消によって、生産と消費のミスマッチを克服し、生産性の効率的な増大を実現するというわけである。社会主義は、このような中央計画経済という手段を用いて、自由と繁栄を実現しようとしたのであった。

3. 自由主義とは - 社会主義批判 -

(1) しかしながら、中央計画経済が実現すると称する「自由」というのは、真の意味での自由ではない。自由とは強制がないこと、すなわち他人の恣意的な強制に服することなく選択の自由を行使できる状態のみを意味しなければならず、「欲することを実行する物理的能力」、すなわち環境を支配する力を指す言葉として使われてはならない。それは他人の恣意的な意志から独立しているという消極的な状態のみを意味するのであって、引力から解放されてどこへでも好きな所へ、鳥のように自由に飛び回ることができるとか、思いのままに自分たちの環境を変える力があるといった積極的な意味で使われてはならないのである。そのような「自由」は権力や富の別名にすぎない。

たしかに、自分自身の計画と決意に従って行動するということは、好ましいというよりは、むしろ大きな負担として感じられることもあるだろう。この種の選択の自由は、とりもなおさず、その自由な行為の結果をも引き受けるという責任と表裏一体だからである。たとえ自分の目的の実現を目指すことが他者の恣意的な強制によって妨げられないとしても、それ以外の様々な制約に縛られて、その努力が実を結ばないこともあるだろう。実際、自由市場において、各人は自らの断片的な個別の知識に基づいて行動するほかはなく、数多くの痛ましい経験を経なければならぬ一方で、その努力が必ずしも報われるとは限らない。しかも、たとえ獲得できた成果といえども、それが常に保障されるわけではないのである。このような不安定な状態は、たしかに辛いことにちがいない。

しかし、だからといって、豊かな地位や身分の保障と引き換えに自主独立の境遇を投げ捨て、各自が間違いなく「その能力に応じて類別され、その仕事に応じて報酬を受け取る」ことをその万能の理性によって保障してやると自称する中央計画主体の「管理」に自分の身を委ねることは、「自由」という言葉の意味内容のすりかえに幻惑されて、真の自由を失うことになるのである。それはまさに、「隷従への道」にほかならなかった。 P41 ~ 44

- (2) 中央計画経済は、自由の意味を消極的概念から積極的概念へとすりかえることによって、真の意味での自由を失わせるだけではない。それは、計画化によって生産性を高め、集団的な力を増大させて繁栄を実現すると称するにもかかわらず、実際にはきわめて非効率的で硬直的な経済へと自らを転落させる。その優れた理性によって全体についての包括的展望を持つという主張にもかかわらず、実際に中央の計画主体が具体的に把握できるのは、きわめて限られた範囲の諸事実に過ぎない。そもそも人間の知識と関心の及ぶ範囲には構造的な限界が不可避的に存在するのであって、人間は社会全体のちっぽけな部分以上のことを知りえない。その人がまったく利己的であるか、それともこの上なく完全に利他的であるか、そのいずれであるかにかかわらず、その人が効果的に考慮できる人間の必要物は、社会のすべての成員の必要物のうち、ほとんど問題にならない微小な部分にすぎないのである。

ところが、社会主義は個人の理性の能力を過大評価し、完全な理性を備えた特定の個人による意識的な統制のもとに、社会過程を従属させようとする。関連するすべての諸事実を視野に収め社会過程を意のままに操作することによって、人間の諸目的に役立つよう、あらゆる社会制度を設計しようとするのである。しかし、このような考え方は人間の理性の限界をわきまえない傲慢な所説にほかならない。

たしかに、問題とすべき変数の数が少なくて済むような単純現象においては、関連するすべての諸要因を視野に収めることも可能だが、事象の生起に影響する要因がきわめて多岐にわたるがゆえに変数の単純化が許されない複雑現象においては、それは不可能である。価格形成や競争の下での生産動向といった市場経済において生起する現象は、まさにこの意味での「複雑現象」にほかならない。というのも、それらはそのときどきの需要と供給に関する一時的かつ局所的な無数の具体的な諸事情に影響されて生起するものだからである。それらの無数の諸事情に関する知識は、ある単一の計画主体が集中的に管理できるものとして存在しているのではなく、それぞれ自由に独立して活動する無数の経済主体の間において、断片的でしかも互いに矛盾しさえするものとして、社会全体に分散した具体的な「現場の知識」としてしか存在しえないのである。

そのような限界の中で生産を中央集権的に指揮し、それを消費と調和させようとするならば、本来の複雑性を強制的に単純化し、閉じられた静態的な状況を人為的に創出した上で、制御可能な程度にまで、生産と消費の多様性の度合いを縮小させる以外にないだろう。市場競争の盲目性を解消するということは、生産効率の増大を意味するのではない。それはむしろ、

利用できる知識をある単一の理性に可能なだけの範囲に縮減させることであり、社会に分散してのみ存在する多種多様な知識の利用を不可能にすることによって、不断に変化する経済的諸状況への適応を阻害することなのであった。このように中央計画経済は、自由の実現においてのみならず、繁栄を実現する上においても、きわめて不適切な手段にほかならなかったのである。

- (3) 社会の繁栄に不可欠な分散的知識の活用をうながす選択の自由は、しかしながら、その自由を行使する個人に対して、厳しい自己責任を負わせるものでもあった。すなわちそれは、自己の潜在能力を現実に発揮する方途を、他者の指示によることなく各個人が自分自身で見つけるべきことを意味しているのである。これは複雑性の低い前近代社会ではあまり必要とされないことであった。「専門化の度合いが低く、組織の複雑性の度合いも低かった時代、ほとんど全ての者が現にある機会の大半を知りえた時代には、自己特有の技能や才能を活用するための機会を見つけるという問題は、〔現代ほど〕難しいものではなかった」。ところが、「社会とその複雑性が拡大すると、人の望むことのできる報酬は、自分の持っているかもしれない技能や能力にではなく、それを正しく活用することにますます左右されるようになるのである」。したがって、たとえ潜在能力は同等であろうとも、それを有効に活用する機会を実際に捉えることができたかどうかによって、その結果には大きな相違が生じてしまうことになる。

自己の運命に対するこのような自己責任はたしかに非常に厳しい要求であり、人々の不満の種となるだろう。「自由によって課せられる選択の重荷、自己の運命に対して自由社会が個人に課す責任が、現代世界の諸条件の下で、不満の主要な源泉となっている」。「有用な分野や適切な仕事を自分で見つける必要があるということは、自由社会が我々に課するもうとも困難な規律である」。しかしながら、(彼に言わせれば、)各個人にそのような選択の重荷を負わせる“自由の規律”は、社会に分散する知識を有効に活用しようとする自由社会に伴わざるを得ない不可欠の要素なのである。

ある人の価値や報酬が抽象的な能力に依拠するのではなく、それを具体的なサービスに転換させ、代価を支払うことのできる人にとって有用なものとすることに成功するかどうかに依拠するということが、自由社会の本質である。そして自由の主要な目的は、個人の獲得できる知識の最大活用を保障する機会と誘因とを共に提供することなのである。この点において個人を他に類例のないものにするのは、その個人のもつ一般的な知識ではなく、具体的な知識、すなわち個別の諸環境や諸条件についての知識である。

社会主義は人々をこのような自己責任から解放し、「万能の理性」に基づく経済統制によって繁栄を実現することを主張した。ところが、それは全くの幻想に他ならない。自己の運命に対する自己責任という厳しい“自由の規律”を人々に負わせることなく、中央統制経済によって繁栄を実現しようとするのは、分散的知識の活用を不可能にするがゆえに、むしろ

繁栄を阻害する硬直した経済を生み出すことになるのである。

社会主義も自由主義も、ともに自由と繁栄との実現をその目的とするが、社会主義はその目的を実現するための手段において誤っている。社会主義は人間の理性の能力を過大評価する傲慢な合理主義をその手段としていたために、自由と繁栄という目的を実現できない。それどころか、かえって社会主義は自由を抑圧する独裁政治と繁栄を阻害する硬直した経済へと至りつくだろう。

P52 ~ 56

[コメント]

リーマンショックによる世界同時不況突入以来、いわゆる「市場原理主義」とよばれるものに対して世界中で非難がわきあがっている。金融工学を駆使した詐欺行為に近いサブプライムローン、仕組み債や格付機関の違法性は極めて大きいものとは思うが、もう一度冷静になって社会主義とは何か、自由主義とは何かを勉強し直すことも大事だ。社会主義は全体主義に通じると警鐘を鳴らし続けたハイエク先生の著作を、少しずつではあっても学び直すことはその第一歩と考える。この山中優先生の著作は、ハイエク研究の入門書として広くおすすめしたい。尚、ここで言う「社会主義」とはサン・シモン主義を言う。

- 2009年9月14日 林明夫記 -